

編集委員の皆さん、こんにちは。

今回は、11月1日と12月3日の2回にわたって開催しました講演会、テーマ「沖縄の信仰」からその内容をご紹介します。特に、御嶽や殿、井戸(カー)、火又神などの拝所を取り上げていただきました。私たち地元の者にとっては大変身近な場所の知られざるお話、地元再発見です！ また、現在行われている森口公園の遺跡発掘調査現場の写真を撮影しましたので、併せて掲載します。



課長

— 平成 22 年度第 2 回講演会 「沖縄の信仰 その1」 — H22.11.1

★ 日本の山岳信仰と“移動する神様

“ウタキ”という言葉には「御嶽」という字をあてるのが普通ですが、たまに「御岳」と書く場合があります。

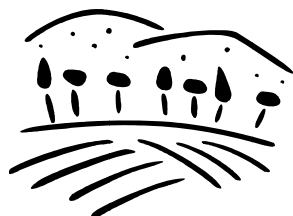
東京や神奈川など、本土の方には「御岳」というところがあります。それは、1,000mまではいかない程度の 500～600m以上の山で、そこには山岳信仰、山そのものに対する信仰というものがあります。

例えば、世界文化遺産の熊野山岳信仰は、奈良県の修験道・仏教の高野山・神道の熊

野三山をはじめとしたこの地域が世界遺産として登録されています。ここは日本人が考えてきた、心の支えとしてきた神様や仏様が宿る場所として信仰されてきました。

石川県の農村部では、春になると「山の神」が里に降りてきて田を守る「田の神」となり、秋の収穫を終えると山に帰る、つまり神様が山と里を行ったり来たりするという信仰があります。

この神様は川を伝って移動するわけですが、時に川の神である河童と見間違ふことや、逆に河童が田の神と勘違いされている地域もあります。



また、本土では神輿(みこし)を担いで祭りが行われます。この神輿は神様の乗り物。神様がいる本来の場所は神社で、神様はそこから旅に出るわけです。地方によっては海に帰る神様もいます。人間が神輿を担ぐことによって、神様は移動します。



沖縄の信仰としての御嶽は、こういった本土の山に対する信仰とは異なるもので、御嶽の神様は部落のすべての人たちの神様、部落の神様として祀られます。また、御嶽の神様が移動するという話も聞きません。

### ★ 沖縄の御嶽 — 墓地として

沖縄の貝塚時代は、創期・前期・中期・後期・晩期に分かれ、創期は縄文時代の始め頃、後期は城(ぐすく)時代に重なり、鎌倉時代に及びます。1万1千年余りもの長い年月にわたるので、貝塚時代といってもその暮らしぶりはだいぶ異なります。海のそばに住む時期、山の方に住む時期、その間に住む時期と、部落が移動します。

やがて形成される聖地・御嶽は、必ずしも山の上ではありません。どういう所かと言えば、[普段は生活をしないう所]=[この世の人がいない所]=[亡くなった人がいる所]。つまり、人が葬られた場所と言えます。

近くに集落があっても、崖の上にあたり、人がなかなか行かないような場所にあります。例えば、浦添ようどれ・大里村の大里城・今帰仁

村の運天港。また、農業をするには水が遠い、日当たりが悪い、高台すぎる、遠い(距離的には近いが行こうとすると不便で行きにくい)などの地。例えば、目の前にある島。羽地の小さな島は皆お墓になっています。

御嶽と呼ばれるところは、周りにお墓が多くあります。

ところで、日本の中世までは個人のお墓というのはほとんどありません。沖縄も同様で、国頭村安波という部落では、明治40年代頃までムラ墓が使われていました。宜野座村漢那では大正年間までムラ墓で、皆そこに葬られました。

個人でもなく、各門中でもなく、“ムラの人は皆一緒”という意識の中で、山・森がその場所として許されたのです。

### ★ 沖縄の御嶽 — 腰当(クサティ)の神として

1713年、琉球王府は全地域に対して、部落には神がいるか、何という神か、御嶽のことを何と呼ぶのかという質問調査を行いました。

その回答は「～嶽」という答えが多く、中には「～森」としたところもあります。ただ、質問書に答えるためにつけた名前ではないかと思われる節があります。

さて、この調査によって人々は自分たちが属している部落はどこなのか、そこで皆で拝んでいるのはどこなのか、何なのかということ意識し

始めました。

そこは本来、ご先祖様がいらしたところ。しかし、長い間にはご先祖様の顔もわからなくなって、いつしか神様になっていきました。それが腰当(クサティ)の神。小さな子どもを膝に乗せて、子どもが安心した様子、そうやって部落の人たちを守ってくれる神様です。

それが各部落に普通は1つありますが、小禄の場合には2つあるわけです。

## ★ 小禄の2つの御嶽 — 小禄ノ嶽（金満御嶽）と真玉御嶽

琉球国由来記に表れる小禄の御嶽の1つは、シンプルに「小禄ノ嶽」という名前です。

イビナー（神名）は「ミキヨチャマベノ御イベ」。意味はわかりませんが、読み方としては「ミチョチャマベ？」→「ミチョチ？」→「マキヨ？」ではないか。「マキヨ」というのは部落を表しています。発音は「マチュー」「マチ」で、人々が定住し農耕が始まりだす頃の表現です。

小禄ノ嶽（金満御嶽）は先述のように、人が住まないといった山の上にあります。しかし、出土する遺物からすると城であったという説も否定できません。

また、人々が海に出入りする時に使われた重要なポイントである国場川の河口、漫湖を見渡せる位置であることも大事です。

もう1つの御嶽、「真玉御嶽」のイビナー（神名）は「トモヨセノ御イベ」。この「ヨセ（ユシ）」というのが大事で、“寄ってくる”という意味があります。“トモヨセ＝諸々のものが寄ってくる”。

また、「ヨセ」というのがついているところは大体、海に面しています。真玉御嶽も周辺まで入江が深く入り込んでいた、海に浮かぶ島であったのではないかと考えられます。

「小禄ノ嶽」が祖先の神として崇めているのに対し、「真玉御嶽」は海の彼方にある理想郷、ニライカナイを意識しています。そして、ミントン（アマミキヨの安住の地：玉城）とのつながりが見られますが、小禄にミントンと関わりのある家があるのか、ミントンをいつ頃から意識するようになったのか？

国造りの物語と結びついてくるような話です。

---

## — 平成22年度第3回講演会「沖縄の信仰 その2」 — H22.12.3

### ★ 大切にされる井戸（カー）

沖縄では「カー」と言えば井戸のことですが、日本では「カワ・カハ」＝川・河、水のあるところ水源です。

この井戸はとても大切にされます。例えば、班ごとに井戸があったり、もともと古くから拝みの対象でありながら暮らしと結びついているような井戸があります。

その中で最も大切にされるのが「ウブガー」です。漢字をあてると「産井（川）」。子どもが産まれると最初にお湯を沸かすための水を汲みにいきます。また、誰かが亡くなった時にも最後の体を拭くための水としても汲んでいきます。その際に、このウブガーの神様に報告をします。つまり、ウブガーの神様はムラの戸籍係のようなものです。

その他に身近な井戸は、自分たちの命を支えてくれる水を汲むところとして拝みの対象としています。特に五月・六月のウマチーでは、拝みのコースに井戸が入ってきます。

また、「ハルガー」と言われる井戸があります。畑の井戸。農業用水を確保するための井戸で、部落から少し離れた畑の間にあることが多いです。字小禄では島田ガーやアモールシガーがそれに当てはまります。

字小禄は二一層の多い土壌なので、あまり水質は良くないと思われていましたが、明治時代の調査報告書でかなり水質がいいということがわかりました。

ニービ層があって海に近い部落では、土壌が海水を通しやすいために飲み水に適さないということがあります。その典型が那覇で、昭和の初めに水道が通るまではウティンダの水を汲んで買って飲んでいました。

もともと沖縄は長く水に苦勞してきたところですので、この井戸に香炉を置いて拝み、今日でも大切にしているということがあります。つまり水の神様を大事にしているということです。

アモールシガー ⇒



## ★ 火又神 (ヒヌカン)

家庭で火又神を司るのは女性、主婦です。生活にとって大事なもので、そのそばにいるのは主婦というわけです。

お葬式がある時には、真っ先に半紙を張るのが火又神です。仏壇よりも先です。なぜなら、この火又神が王様のいるお城までつながっているからです。

わかりやすくいえば、インターネットと同じようなものです。各家庭の火又神から、プロバイダーであるいくつかの中間地点を通して、サーバーである首里城の火又神へとつながっていきます。中間地点には、ムラ火又神や里主所火又神があります。

ウィルスに感染すると、そのウィルスがムラ中に広がり、間切に広がり、国中に広がってしまいます。それを防ぐために真っ先に半紙を張るわけです。

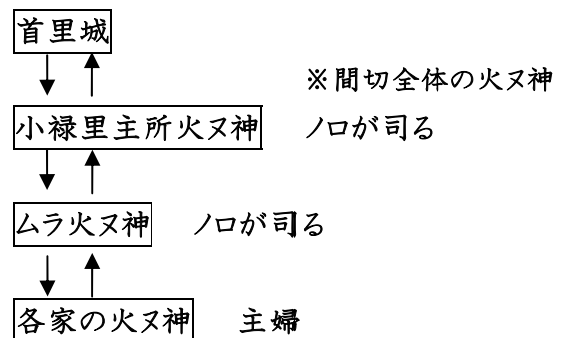
字小禄には小禄里主所火又神がありますが、これは小禄間切全体の火又神で、間切に1つしかありません。どこの部落にでもあるわけではありません。

ちなみに井戸は大きく分けて2種類あります。縦に水源まで掘り下げて貯めた井戸をカー。横に掘って石で造った樋(とい)をかけて水を出すものをヒージャー。ヒージャーガーと言っているところもあります。

首里城の2階に“おせんこみちや”という部屋があります。そこには小さな火鉢があって、“御火鉢之御前”(ヌヒファチヌウメー)と読みます。火鉢の中には小さな石が3つ置いてあります。いわゆる“御三物”(ウミチムン)。

これが火又神の象徴的なものとして置いてありました。

家庭では、今は香炉だけになっているかと思いますが、本来はカマドのそばに石が3つ、三角形に置かれていました。元々、鍋を置くためのコンロの役割をしていたもので、その名残と言われています。これが火又神の原型です。



## ★ 殿 (タウン)

どこの部落にもある拝所として殿があります。やんばるでは“カミアシャギ”“カミアサギ”と言います。恩納村の南の辺りを境に呼び方が変わります。

琉球国由来記の中では、真和志間切だけが殿に神様の名前がついています。普通は殿に神様は常駐しません。祀りの時だけ御嶽から神様がこられます。御嶽は男人禁制で、この殿までは入ることが出来ます。

今帰仁村の崎山の部落には、県指定のカミアシャギの建物が残っています。藁ぶきの9本の柱に支えられた低い建物です。そこには丸太が1本置かれて、祀りの時には神様がそこに座ります。

カミアシャギといわれるところの新しい建物はコンクリート造りになっていますが、壁がありません。

南部の佐敷町の屋比久辺りは四方をコンクリートで造った殿がありますが、こういったタイプは比較的新しいものではないかと思えます。

小禄の殿には大きな建物がありません。これが多分、全琉で唯一の事例だと思われます。各門中の拝所はありますが、神様を迎えてお祀りする建物がないというのは特徴的です。古い形態がそのまま残っているといえます。

“ナー”とか“ミャー”といった広場、空間がとても大切に、何も無いということが重要です。

## ★ ビジュン・トゥーティーケー

ビジュンとトゥーティーケーは、それがあある部落とない部落があります。小禄の場合は両方あります。どちらもチュクイムジュクイ(作物)の神様とされています。

ビジュンは部落によって、ビッチリー、ビジュールという具合に言い方が違います。

また、石を祀って占ってもらう神様として崇めているところもあります。

ビジュンは元々沖縄の神様ではありません。外国の神様です。「賓頭盧(びんずる)」と書きます。インドの仏教、十六羅漢の筆頭で仏様をお守りするための修行者の1人です。日本では撫で仏として尊ばれてきました。

沖縄に入ってきて、いろいろな役割の神様に変化してきたと思われます。

トゥーティーケーは「土帝君(とていくん)」で、中国の神様です。中国の古くからの信仰に道教という信仰がありますが、その神様の1人です。

土帝君は人間のいるところに住んでいる神様で、あまり身分は高くありません。土を預かっているので、怒ると作物をダメにしたり、牛や馬を暴れさせて畑をダメにするという、やっかいな神様です。でも、とても人間臭い神様で、おだてに乗りやすく、うまくおだてると作物をたくさん作ってくれます。

沖縄ではこの土帝君の方が普及していますが、どの部落にもあるというわけではありません。

この神様とルーツを同じくするお墓専門の神様がいます。「ヒジャイ」といって、お墓の土地を守る神様です。お墓に拝みに行くと、正面に向かって右の隅っこをまず拝みます。これがヒジャイとして伝わっています。実は土帝君の奥さんです。

このように外国から伝わってきた神様がこの小禄にもいて、生活と密接につながっています。

## ★ 小禄にある祠 (ほこら) の形

殿や金満御嶽には小さな祠がありますが、上の部分を屋根の形にしているのは字小禄のオリジナルだと思えます。

他では見られない、特徴あるものなので、是非、字誌でも取り上げるといいでしょう。

## 【森口公園での埋蔵文化財発掘調査】

那覇市教育委員会の調査をしている方のご好意で、中に入って説明を受けながら写真を撮ることができました。

場所は大里小屋敷跡。土の中から出てきた石畳はとても緻密なものでした。また、左右の石垣には違いがあります。左側の石垣が削って加工されていることから、当時、そこはお金持ちの家であったことがうかがえるそうです。



### < 編集後記 >

最後まで読んでいただきありがとうございます。  
今回は盛りだくさんでした。

ようやく執筆が始められそうな気配です。皆さん、来年も  
よろしく願いいたします。 (事務局 上原仙子)